たらちねの
み親のもとにいる児らは
御名を唱うる声ばかりなり

同門

平成20年2月1日
第28号
発行　梅花流師範・詠範の会
会長　柴田弘一
題字　初代会長・故加藤信三師
編集者（広報部）　亀谷　隆道

梅花流師範・詠範の会事務局
五城目町　待月院　嶋森憲雄
電話（0188-52-9566）

頌春

秋田県梅花流師範・詠範の会　会長　柴田弘一

新春を迎え、みなさまにとりまして幸多き年でありますようご祈念申し上げます。

本年もどうぞよろしくお願いいたします。

さて、年の始めに誠に恐縮に存じますが、梅花の恩師の訃報を記させていただくご無礼をお許し下さい。

昨年の十一月八日、永田正道正伝師範が七十八歳の生涯を閉じられました。「地蔵菩薩御詠歌（慈念）」と「誓願御和讃」を作曲された方ですので、覚えておられる方も多いのではないでしょうか。

先生は静岡県の伊豆半島、修善寺にほど近い土肥（土肥金山として有名）の〝松源山光月院〟の住職を五十有年つとめられました。

梅花流の草創期より興隆発展のため、深く関わって来られた方で、梅花に対する情熱は人一倍強く、まさに梅花に一生を捧げて来られた、と言っても良いほどの先生でありました。

当県にも幾度か足を運んで下さいましたが、その指導は細やか且つきびしいものでありました。

本人がわかるまで、何時間でも時を忘れて一人ひとりを丁寧にご指導下さいました。

先生から梅花を教わりはじめて約三十年になる私ですが、先生の前ではいつも緊張してしまい、思う様にお唱えが出来ず、冷や汗をかきながらも手とり足とり教授いただいた事を今あらためて思いおこしております。

故安田博道正伝師範と共に、梅花流に於いて一世を風靡した先生に対し、十一月十六日の本葬の折、曹洞宗管長さまより〝管長表彰状〟が贈られ、先生の栄誉が称えられました。

梅花流師範として前例がない賞を受けられ、先生も泉下で静かに微笑んでおられることと思われます。

私のような出来そこないを飽きもせず温かく又きびしく育んでくれた事に、ただただ頭を垂れ感謝の念でいっぱいであります。

教授いただいた内容を、今後にお伝えして行かねば、と。そうして行くことが、少しでもご恩がえしにつながるのでは、と。

霊前に焼香し合掌礼拝しながら心に誓ったことでありました。

研修会のおもいで

中央地区

由利本荘市矢島　龍源寺

「一泊研修会に参加して」

寶圓寺講員　須田　マツ子

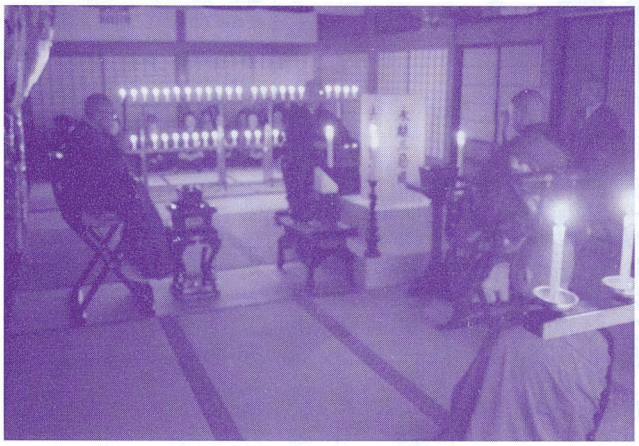
十月二十五日～二十六日の二日間にわたり龍源寺様で行われた講員一泊研修会に参加させて頂きました。

講習は、規律ある研修生活の中で楽しく勉強できましたことは、まことに講師の先生方、またご住職様やお手伝い頂いた皆様の細かいご配慮のお陰と、心より感謝申し上げます。

夜の万灯供養では、師範先生のお唱え、そして太鼓の音が鳴り響く中、厳粛に執り行われました。若いお坊さん達が一生懸命お勤めしてくださる姿を見て、ありがたさで胸がいっぱいになり、涙が出てきました。

先生方の作法を見、そしてお唱えを聴いて感動し、自分もその姿に一歩でも近づきたいと思いました。

梅花流は奥が深く、私には、一生涯の勉強、そして人生の勉強だとあらためて感じさせられました。



灯に何をば祈る供養の涙

五観の偈を唱えて夕食を頂く

前列真ん中の５人目が筆者

位牌堂にて研修中

梅花のつどい　梅花流講員　一泊

県北地区

北秋田市上杉　太平寺

「梅花講員　一泊研修会に参加して」

宝田寺講員　渡辺　フミ

菊薫る晴天に恵まれた十一月十三日、十四日の二日間にわたり上杉のお寺太平寺で一泊研修会が開催されました。当日は九時三十分受付、受講者百二十六名と聞いて、びっくり致しました。余り申し込みが多いので「締め切った」とのことでした。

主催者師範詠範の会副会長柳川浩二師範の御挨拶、詠道の上手下手でなく唯ひたすらにお唱えする事が人々の心魂に通い、響いてゆく原動力であることを教わりました。

全体講習会場主亀谷健樹師範の御挨拶の中でお寺はやすらぎの場所である。人を思いやり和合と笑顔で、努力も大切であると諭されました。

午後からは初心者詠唱A・B所作、作法コース分科会で講習が始まりました。万灯供養大般若祈祷、導師より般若の薫風を受けて奉詠中灯明を立てて着席、これがお釈迦様の成道の教え、自分が仏様と一体に成った無心の気持ちで、感無量で胸が熱くなり涙が止まりませんでした。

次の日の朝は気持ち良いラジオ体操・坐禅で始まり、お茶会、胸をワクワクさせながら一ぷく頂きました。

御詠歌研修会の中に坐禅・お茶会を取り入れた企画、その中でも梵鐘の響きは心に残り、今回ほど感動したことはありませんでした。

講師、事務局、十教区若手僧侶、寺族の皆さん何ヶ月も前より企画され、御配慮に預かり感謝致しております。

梅花講研修会は時間の経つのが早く感じられ、とても充実した二日間でした。参加させて頂き心からお礼申し上げます。

御仏の恵みに授かりました二日間の思いを生涯の道標にしたいと思います。

ありがとうございました。

御詠歌を共に学びし太平寺
坐禅にしみる梵鐘の声

○若男女の元気いっぱいのラジオ体操

野点で一服を味わう

梅花のふるさと

鐘の音は仏のみ声

～詠讃歌の生まれた風景〈その六〉～

赤松月船の詩境

追善供養御詠歌

打ち鳴らす鐘の響きはそのままに
三世のほとけのみ声なるらん

作詞　赤松月船師

◇消えゆく音が大切◇

平成九年、百歳で亡くなられた赤松月船老師。草創期から、曹洞宗梅花流の成長発展に尽くされたおひとりです。曹洞宗の伝統的な教えの上に、いかに梅花流を位置づけてゆくかを模索した「教え」の面での第一人者でありました。

一方「お唱え」の面で代表的なお一人として故安田博道老師がおられました。

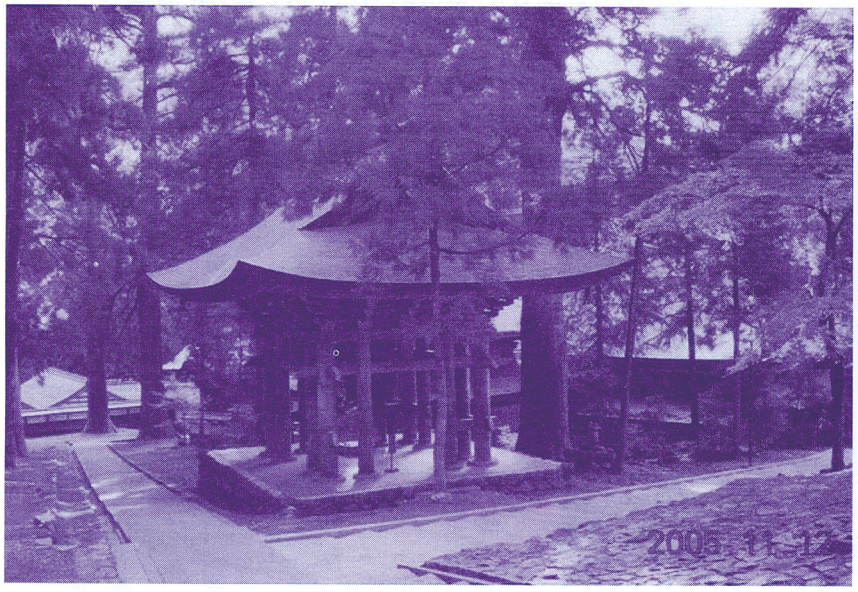
作詞を赤松師、作曲を安田師、というお二人で作成された梅花流詠讃歌は少なくありませんそのひとつ「妙鐘（追善供養御詠歌）」について、お二人の対談の記録があります。

赤松　鐘の音というものは、ゴーンと撞木で鳴らしたら音が出るという、それだけの単純なものじゃないわけなんですね。撞木でゴーンとつくでしょう。すると一度、鐘が縮まるんです。それがまた元へ戻るときにあの響きが出るんです。その響きというものは、乳座といういぼがありましょう。あのいぼの列の間の線を通っているときの鐘の音は一筋なんですね、ゴーンと。ところが、乳座がその線の上にある時には唸りがつくんです、ウォンウォンウォンと。それから鐘の音は、つく人の心だけの音しか出ないということです。たとえば除夜の鐘をよく聞いていますと、これは永平寺の鐘が一番いいんです。どういうわけかというと、大梵鐘のある位置が、ちょっと谷の底のようなところにありましてね。だからこだまがあるということ。そして空気が非常に澄んでいる。だがそれだけじゃいけないんで、永平寺の雲水達が、除夜の鐘を撞くときには、法衣を着けて、お袈裟をかけて、一撞きごとにお拝をして撞きます。それが響きになって出るわけです。

安田　ですからそういう格調の高い、意味深い詩だから、いわゆる三世諸仏の御声だということでしょう。諸行無常を伝えるのだから、梵鐘をついた瞬間の音じゃないんですよ。ゴーンと打った後の余韻を聞きなさいと、私はそういうふうに読んだんです。そこに生きた仏があるんですね。

赤松　たとえば高いところに寺があって、鐘楼が高い所にあると、響くというものじゃないんです。もう一つ反響が必要。

安田　私の師匠は、鐘をひとつつくにもやかましかった師匠なんです。ゴーンゴーンと続けさま



【永平寺の鐘楼堂】

に打つんじゃないって。ひとつ打って、だんだん響きが消えてゆくものを聞かせなければいかんのだから、あわてて連打するなと言われたことがあります。

赤松　その通りです。鐘の響きというものは、ゴーンとついたら、消えていく音をきかなんだらだめだというんですね。私はそういう詩を書いているし、とにかく鐘を突いてみると、やっぱり消えてゆく音を聞かにゃいかんです。鐘は消えていく響きを聞けということ。ゴーンと撞くでしょ、そうすると、ウォンウォンウォンと余韻が響いていますよ。それがすっと消えたときに自分の心の世界が整っていることに気がつく。鐘の値打ちというものはそこにあるんです。（『歌声に仏まします　梅花流とともに歩んだ三十五年―安田博道回顧録』より）

【坐禅中の赤松老師】

同じく赤松師の作られた「報恩供養御詠歌（澄心）」の「消えてゆく鐘の響きに聞き入れば」ではじまる御詠歌も、以上のような鐘の音に対する思いを土台として詠まれたものと、察することが出来るでしょう。だんだんと消えてゆく音の響きに聞き入っていると、いつしか心が澄んでくる不思議な鐘の音の功徳を詠まれたのが、「報恩供養御詠歌」だったのです。

◇詩作を通じて◇

赤松師は僧職に身を置きながら、若年時より文学活動にも活躍した人でした。室生犀星、佐藤春雄、高村光太郎、今東光など著名な文学者達と親交を深めながら、多くの詩作を残しています。その一つに鐘の音を主題としたものがあります。

暁鐘をつく

鐘の音の　消ゆる幽けさ。
韻をひく　すがしさ、深さ
一天は　玻璃に澄みたり。
鐘の音の　消ゆる遠くに
われとわが　心奪われ、
韻をひく、ひとつひとつに
弦月の　黄金は瞬き、
峰々の　緑は覚めぬ・・・・

（昭和十六年作『赤松月船全詩集』より

【赤松老師の住した岡山県・洞松寺】

青年時代、永平寺の鐘楼堂で自らつき鳴らした鐘の音は、詩作活動を通じて文学としてみがきあげられ、さらに雲水としての坐禅修行によって熟成し、「ほとけのことば」として、赤松師の耳に聞こえていたのではなかったのでしょうか。

遠ざかり、小さくなりゆく鐘の音に、虚心に聞き入るように、まっすぐすなおな心でものごとに向かうことが、「ほとけのみ声」に出会ういちばんの近道なのかもしれません。

（龍泉寺　佐藤俊晃記）

みんな梅花やらネイガー

おらほの梅花講

谷陽山（こくようざん）源守院（げんしゅいん）

住所　大館市出川字上野
設立　昭和三十二年
講長　越姓玄悦
講員三十人

源守院の所在地はかって真中（まなか）と呼ばれた地域でした。五十年程前の町村合併により村名はなくなりましたが、現在でも「真中の源守院」と呼ばれています。県北地区の真ん中に位置することから、真中村と名づけられたのだと思いますが、大館市の中では南端に位置し、すぐ隣は北秋田市（旧鷹巣町）になってしまうので、以前のことを知らない人からはどうして大館の端なのに真中なんだと言われることがあります。

源守院の梅花講の設立は真中村が大館市になったあたりと聞いていますので、既に五十年ほどの歴史があることになりますが、残念ながら設立当時のことについてはほとんど知識がありません。現在は講員さんの都合に合わせ二グループに分けてそれぞれ月一回練習の日を設けています。年間の行事への参加としては、お涅槃やお寺での葬儀、各地区での亡くなった方への中陰供養、全国奉詠大会、全県奉詠大会への参加。梅花講員だけの参加で降誕会や成道会のお勤めなどですが、梅花三昧という訳ではなく、慰労や親睦のための新年会や忘年会では、ちょっと梅花を離れて骨休めに専念しています。

平成12年の晋山式にて

記憶に残るのは平成十二年の現住職の晋山式と平成十五年に地元大館市で開催された全国奉詠大会です。晋山式では稚児行列を先導して五百メートルを三宝御和讃を立行で奉詠。

習い始めたばかりで座行もままならない講員さんも多かったのに歩きながらの立行は大変だったと思います。天気にも恵まれ沿道にはたくさんのお檀家さんが見物に立ち、緊張の中にも晴れがましい経験であったと思います。地元での全国奉詠大会は準備から参加させていただいたこともあり、当日の感激は言葉では言い表せないものでした。講員さん達も、念願の地元の開催が叶ったのだから一人残らず参加しましょうという意気込みでした。全国大会の参加者の低迷が懸念される中で、一万五千人の方々が全国からお集まりいただいたことは梅花にご縁をいただいている者の一人として本当に嬉しく感じたことでした。

現在、講員さんは間もなく米寿を迎えようという大ベテランからうら若き乙女まで経験も年齢も多彩な顔ぶれですが、心を一つにして詠道に専念できるようお手伝いしていきたいと思っています。

紹介者　講長　越姓玄悦

梅花流秋田県奉詠大会開催

昨年八月二十六日に秋田市の県立武道館において、梅花流奉詠大会が開催されました。

全県から千余名の講員が参集し、登壇奉詠で日頃の修練の成果を存分に発揮して頂きました。

開会式の「お誓い」では、秋田市西来院講員の長谷川敏子さんが七十八才とは思えぬ朗々としたお声で挙唱司を務められ、千余名の信心が会場内に響き渡りました。

長谷川さんは、後日「私のような者がお誓いを唱えさせて頂いてありがたかった。その日は緊張して何が何だかわからないうちに終わって帰りました」ということでした。

またこの度は、新曲の「新亡精霊供養御和讃」が披露され、本間雅憲師範に解説、指導していただいての全講員の合唱、師範詠範の模範詠唱と、秋田の「浄らかなる心の調べ」は、大円成に到りました。

挙唱司をする長谷川さん

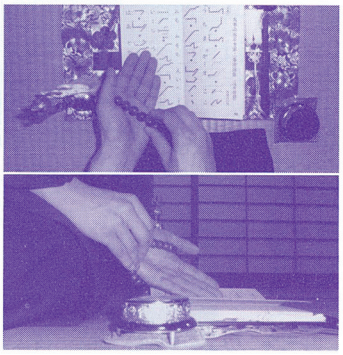
写真で見る基本作法

～（その11）念珠の掛け替え～

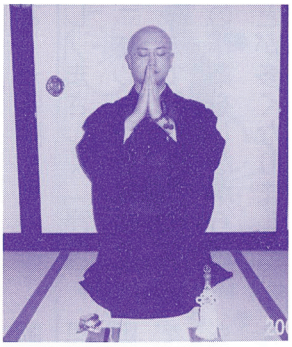
梅花流詠讃歌の中で、「浄心」「渓声」「明星」の三曲は打鉦のみのお唱え。
鈴は使わずシュモクだけ。だから忘れちゃいけない〈念珠の掛け替え〉と（家の戸締まり）
坐行の場合は片手合掌でお唱えし、立行の場合は念珠の掛け替えは無し。
写真はあくまでも参考です。実際の習得にあたっては各講中においてご指導を仰いで下さい。
※現教典では三曲はいずれも２ページ開きです。

【教典を置いて、すぐ掛け替えの場合】

①教典を開いて置く。

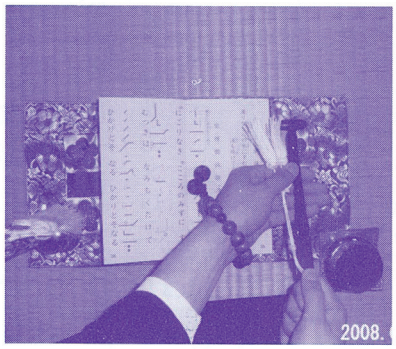


②おおむねひざがしらのあたりまでに掛け替える。



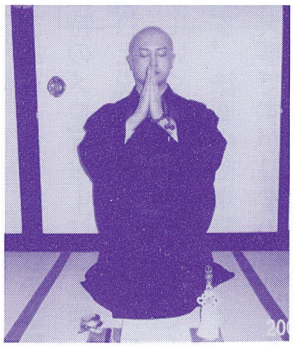
③掛け終わって合掌となり詠題に入る。

【撞木の置き替えをして、掛け替えの場合】



①撞木を梅花紋上に置く。

②おおむね左ひざがしらのあたりまでに掛け替える。



③掛け替え終わって合掌となり詠題に入る。

◇他の留意点◇

◎奉詠後は撞木を定位についたまま、片手合掌で唱念し、撞木を定位に置き、直ちに念珠を左手首に掛け替えて合掌一礼する。
◎鉦のみを用いる同一曲を続けて奉詠（連唱ではない）する場合は、一曲ごとに念珠の掛け替えはしない。

テレホン梅花

☎〇一八一八七三一七六七六（ハナミ ナムナム）
（毎週土曜日にテープが代わります。）

▼一月五日　慶祝
十二日　まごころに生きる
十九日　梅花（高祖）
二十六日　渓声（永平一）

▼二月二日　法灯（太祖）
九日　涅槃（和）
十六日　不滅
二十三日　高嶺

▼三月一日　四摂法（和）
八日　花供養（和）
十五日　彼岸（和）
二十二日　供華

▼四月五日　良寛さま
十二日　三宝（和）
十九日　誓願（和）
二十六日　御授戒（和）

▼五月三日　観音（和）
十日　平和祈念（和）
二十四日　慈光
三十一日　浄光

▼六月七日　修証義（和）
十四日　伝心
二十一日　澄心
二十八日　妙鐘

※ご意見、ご要望等お気軽にお寄せ下さい。

〒〇一一〇一〇一一一
秋田市金足岩瀬字前山三
東泉寺（〇一八一八七三一二六七五）

ちょっとぶじょほう ～梅花つれづれ～

年末大掃除にて
～寝ても覚めても梅花流～

能代市二ッ井町
清徳寺副住職
鈴木泰賢

十二月に入ると、当寺では年末の大掃除を大々的に行います。ほとんどのお寺さんでも同じように行っていると思いますが、当寺の様に普段作務をサボり気味のお寺では一大事です。堂内各所に安置された観音様、お地蔵様、両祖様、御開山様など、一年間たまった塵と埃をハケで払い落とし、まさしく「浮き世の塵はあとかたもなし」にしなければなりません。そのほとんどを一人で行うことになるわけですが、最近はその作業をしながら御詠歌を口ずさんでいることが多くなりました観音様の時は「慈光」、御開山様の時は「真清水」等々、知らず知らずのうちに口ずさんでいます。

私は高校生の頃、毎月二十一日の夜になると聞こえてくる、梅花のメロディーがどうにも好きになれませんでした。当時は能代市玉鳳院柳川浩二師範のご指導により、毎月二十一日に講習会を開いていましたが、チン・リンリンという音がなんとも辛気くさく感じられ「お年寄りのやるもの」といったイメージを持っていました。

そのイメージが変わったのは本山安居中御征忌での法要中、詠讃師さんの独詠を聞いた時でした。永平寺の広々とした法堂に響き渡る御詠歌、たしか曲は廓然だったと記憶していますがその響きを聞いた時、ただただ「ありがたい」と感じ、御詠歌に対する考え方は一変しました。

古来より仏教では声明、曼荼羅、踊り念仏など様々な手法、現在でいうところのメディアを取り入れて布教を行ってきました。御詠歌もその一つであり、大事な布教の手段だと思います。独特のメロディーによる癒し効果、歌詞に込められた説話や教え。一つ一つが日々の生活をしていく上で心豊かにしてくれるものと思います。法要中や奉詠大会でのお唱えはもちろん大事ですが日常の中で、それこそ知らず知らずのうちに口ずさむ御詠歌はきっと心穏やかに、日々の暮らしを豊かにしてくれるものと思います。

講員さんの指導をするようになって早三年が経ちます。正直にいうとあまりにも不足している自分の力量のせいで布教と呼べるような講習は出来てはいませんが、講師の端くれとして少しでも御詠歌の素晴らしさ、お釈迦様、お祖師様方のみ教えの有り難さを伝えていけるよう日々精進して参りたいと思います。

9教区　清徳寺副　鈴木泰賢　九拝

◆禅センター・梅花講習日程◆

【僧侶・寺族研修会】

二月十二日（火）〈午前十時半～午後三時半〉
講師　浅田高明師範
課題　釈尊一代記

【檀信徒講習会】

二月十五日（金）〈午前十時半～午後三時〉
講師　三浦賢翁・郡亮善師範
課題　涅槃御和讃・不滅

三月十三日（木）
講師　森田英俊・佐藤晃心師範
課題　花祭り御和讃・歓喜